

国際機関で働く

～JPOからチームマネージャーへ～

西 光生

MA Globalization, Business and Development (2017年卒)

Innovation Specialist, Sustainable Investments in Infrastructure and Innovation (S3i), UNOPS

国際機関で働く：JPOからチームマネージャーへ

大学院卒業後は、UNDPのイスタンブール民間セクター国際センター、UNDPのメキシコ国事務所でビジネスと開発に携わるお仕事をした後、国連JPO試験に合格。2019年から2年間、UNICEFのセルビア事務所にて、イノベーション担当官として働きました。今年1月からは、UNOPSのイノベーション本部（フィンランド）にて、イノベーション専門官として、スタートアップ支援、民間連携、テクノロジーを用いた途上国開発の支援業務に携わっています。



JPO経験

JPOとしてセルビアに赴任したのは、2019年12月、新型コロナウイルスのヨーロッパ上陸の数週間前でした。ロックダウンが始まり、学校が閉鎖されたことにより、教育、あらゆるコミュニケーションのデジタル化が急務となりました。外出することができなくなった子供たちや女性への家庭内暴力が急増したことも大きな課題となりました。赴任早々、イノベーションチームのフォーカルポイントとして、通信省、教育省、保健省等の政府カウンターパート、ドナー国、他の国連機関等の様々なステークホルダーと連携し、教育や医療のデジタル化、脆弱な子供たちや虐待の被害者が問題を報告し助けを求めることができるようなオンラインのプラットフォーム作りに携わることになりました。緊急支援の経験がない私にとって、非常事態下、スピード感を求められる現場で働くことはストレスになりましたが、今思えばとても良い経験となりました。コロナが落ち着いた後は、セルビアのEU加盟への大きな障壁になっている、環境・大

気汚染問題の改善や、失業問題が深刻化している地方に住む若者への起業家精神醸成の業務に力をいれました。

JPO卒業へ

日本のJPOの任期は基本的に2年間、国際機関と合意できれば1年契約延長ができ、合計3年間JPOとして働くことができます。私は、JPOの2年目から空席公募を始めつつ、3年目の契約延長をする予定でUNICEFと話しをすすめていました。現在のポジションのオファーを頂いた時、正直、UNICEFを離れるかどうかとても悩みました。UNICEFの仕事にやりがいを感じていたし、なによりも、子供と女性の権利を守るというミッションに深く共感をしていたからです。ただ、私の今までの経験の多くが国オフィスでだったのでHQでの業務を経験してみたかったこと、また国連でチームのマネジメントをする経験をしたかったことから、現在のUNOPSでのお仕事を引き受けることに決めました。

現在の業務

入職と同時に、直属の上司となる人が退職してしまったこともあり、現在は、Chief Executiveに直接レポートをしつつ、イノベーション事業全体のコーディネーションをさせてもらっています。部下も何人かでき、仕事だけでなく、いかにチーム全体のモチベーションを上げるか等、ピープルマネジメントにも力を入れていきたいと考えています。初めてのHQでの仕事は、国連特有の官僚主義に悩んだり、一つの業務を完了させるためのステークホルダーの多さに辟易とすることもあります。これもマネージャーとして力をつけるための挑戦だと思い、地道に頑張っていこうと思います。また、仕事だけでなく、人生初めての北欧、久しぶりの先進国での生活を十分に楽しむことができたかなと思っています。



Finland (Wikipedia)

キャンパス便り

神谷 成実

MA International Education and Development



(二列目の右から一番目が寄稿者)

神谷と申します。留学した理由など私の原点を見直す機会になればと思い投稿します。本稿では 留学生活について記載しますので、ご閲覧頂けますと幸いです。

留学の背景

私は、虐待が原因で児童養護施設に入所し、18歳まで過ごしてきました。その間、過去のトラウマと闘う子供たちや非行に走ってしまう子供達、親になって自分の子供に同じ過ちをしてしまう人、自殺をしてしまう人を目の当たりにしてきました。恵まれぬ環境にいる子供達が健全に成長し、そのポテンシャルを活かして活躍できる社会を創りたいと思うようになり、そこで「教育」に興味を持ちました。日本の大学では、国立青少年交流の家でボランティア奨学生をさせてもらい、自然体験キャンプの運営や国際交流プログラムの引率、平和教育ワークショップの運営などのお手伝いをしました。体験が学びのある貴重な教育機会になると気づくのと同時にそのプログラムの情報が貧困層の家庭にも行き届いているか、参加するにあたっての弊害になるものは何かと様々な疑問を持ち始めました。

貧困、経験や情報の格差、教育の機会の格差などの問題に直面する子供たちをコミュニティや自治体、政府が負の連鎖を断ち切るための支援や政策を探求するために国際教育開発学を選択し、大学院への留学を決意に至りました。

学び

長いようで短くもう春学期となりますが、ストライキにより3週間程授業がなく、自学をしています。正直のところを申し上げますと、秋学期は英語の壁にぶち当たり、思い通りに授業のディスカッションに参加できず、悔しい思いをしました。経験豊富なコースメイトと自分を比べてしまい、そのアドバンテージを勉強の熱に運ぶこと

ができなく反省しています。しかし多様なバックグラウンドを抱えた学生と影響力のある先生方に囲まれ、関心のある分野を探索できる毎日にはありがたく思います。日本の大学では、教育が「善」であることを前提に英語教員、日本語教師になるための勉強をしましたが、このコースではポストコロニアリズムや非抑圧者の教育学などの理論に基づいて批判的に教育のあるべき姿や影響力などを考察しました。春学期では、教育を数値的に分析しエビデンスを提示できるように統計学とThe Global Governance of Education and Conflictを学んでいます。私の出身が沖縄で、沖縄戦という苦い経験を学校や家で小さい頃から教わってきました。平和教育、紛争と教育を学ぶのには重きを置いており、授業では豊富な情報量を吸収しています。

留学生活

私はキャンパスの寮に住んでおり、図書館へのアクセスやキャンパスに住む友達にすぐに会えることの利便性に満足しています。日照時間が少ないので、ストレス発散に時々スポーツに参加しています。最近では、まだ不慣れですが、ラングエッジカフェの日本語ボランティアもしています。

イギリスで生活をしていて感心することは、プラスチックフリーなどの環境に配慮された商品が多いことや本や洋服、食べ物など不要な物を必要とする方へ循環させるシステムが身近にあることです。また生理用品にも税金がかからないことにも驚きました。

街では、ホームレスの方への支援を企画したいと案を考えていましたが、短期的になってしまうことを恐れ、まだ何も起こせずにいます。ただ、振り返ってみて、後悔のないよう一秒たりとも無駄にせずに残りの留学生生活を過ごしていきたいです。

今後

修士論文では、情報の格差に視点を当てフィールドリサーチをすることを計画しています。貧困層の家庭が教育のプログラムに関する情報へのアクセス、その利益についてリサーチし、効率的な政策をサジェスチョンできればと考えながらアウトラインを練っております。将来は、教育を通じて社会平和や貧困問題に取り組むUNESCOで活躍できることをイメージしています。

このご縁を大切にしたいと思いますので、何かあればご連絡してください。flowers19961218@gmail.com



キャンパス便り

田川 志織 (たがわ しおり)

MA Childhood and Youth Studies



(前列中央のPC後ろが寄稿者)

現在大学院在学中の田川志織と申します。この記事を通して、同じようにサセックスでの学びを志した皆様と繋がることが出来ればと思い執筆させていただきました。拙文ではございますが、サセックスでの生活を思い出していただき、厳しいコロナ禍の安らぎの一助となれば幸いです。

留学までの経緯

平和教育やメディア情報の蓄積から途上国支援を志したのは私が高校生の時でした。知識やスキルを何も持たなかった私は、まずは働ける人材になろうと短大で英語を含む国際分野の学習や、留学生と戦争について考える団体の立ち上げなどを行いました。卒業後は、迅速に支援に携わりたい、人と関わる仕事において長期の机上の勉強だけでは良くないという思いから、編入ではなくJICA海外協力隊でのボランティアを選択し、ガーナの教育事務所で二年間活動を行いました。こうした経験や様々な団体の活動報告、勉強会を通し、「途上国支援」という曖昧であった関心から「命の危機に瀕している紛争下の子ども」へ支援対象を絞りこむことが出来ました。そして、それまでの経験や学びを学問を通して整理し自身のスキルへ落とし込みたいと考え留学を決めました。

授業

RefugeeやDevelopmentなどの既存のカテゴリーに含まれない子どももサポートできるようになりたいという思いから、子どもについて広くかつ深く学べる本コースを専攻しました。秋学期は、教育、ソーシャルワーク、心理ケア、セオリーなど子どもにかかわるあらゆる基礎を学びました。春学期からはより自分の関心に沿った、紛争と教育のかかわりを学ぶ授業、人類学の観点からメンタルヘルスを学ぶ授業、そして難民や移民の幸福について学ぶ授業を受講しています。講義内容はもちろんのこと、様々な国の様々なバックグラウンドを持つ他の学

生とのディスカッションも大変刺激的で、講義のトピックに対しより当事者意識をもって学ぶことができています。さらにサセックスでは、授業以外にも様々な研究発表会や学びの機会が用意されており、現在は難民教育の研究発表会とアラビア語の授業を追加で受講しています。今学期より書き始めている修士論文では、この道を目指すきっかけとなった日本の戦後の子どもたちをロールモデルととらえ、現在の紛争下の子どもと比較し、平和教育や復興についての可能性を研究していきたいと考えています。

授業外の生活

学内の寮で生活しているため、授業外でも他の学生と多くの時間を共にしています。授業で学んだことについて話し合ったり、グローバルニュースについて議論したりと授業以外の時間も貴重な学びの場となっています。出身は違えどみな同様に世の中を良くしたいという熱い志を持っており、お互い刺激しあいながら日々を過ごしています。また、地元の子どもの対象としたイベントやイギリスの難民サポートなどの校外での実践を積む場があることにより、勉強のリフレッシュがうまくできているように感じます。

キャリアプラン

卒業後は国内避難民の子ども、特に紛争下で家族と離れたり、家族を失ってしまった子どものサポートや将来設計に関わりたいと考えています。これまでの授業を通して、サポートの一般化の危険性、個々のバックグラウンドを注視する重要性を学んだため(例：子どもの権利条約の18歳以下という子どもの定義は教育機会のなかった子どもや飢餓に直面している子どもにも当てはめられるか)、トップダウンの大きなサポートではなく、草の根レベルの個人にフォーカスするサポートをしたいと考えています。まだまだ道半ばで未熟ではありますが、可能な限り多くのことを学び吸収し、一刻も早く全ての子どもが自分の未来を自由に選択できる世の中になるよう尽力していく所存です。

田川志織 (24)

フィールド： 子ども / 国内避難民 / 難民 / 紛争 / 平和教育 / 教育 / メンタルヘルス 等

連絡先： seee116ars@gmail.com (お気軽にご連絡ください!)



Alumni Now!

藤井明子（ふじい あきこ）

専攻・卒業年：MA in Gender and Development
(1996年卒業)

現所属：2021年7月まで国連開発計画モルジブ事務所常駐代表。現在休職中。

今から振り返ると、大きな意味での開発問題に対する関心は小学生時代からあったように思います。大阪外国語大学英語科在籍中には、在日外国人の人権を守る活動に、NGOを通じて関わるようになりました。当時は日本の「国際化」のために留学や企業の海外進出が、国や自治体を上げて推奨されていました。一方、国内では低賃金労働者や農村での嫁不足といった課題に直面し、アジアからの移民が増えましたが、彼ら・彼女らへの差別や格差といった問題に政策が追いついていないと感じていました。同じ頃、「真の国際化は『内なる国際化』なしにはあり得ない」、という趣旨の論文を書き、日本経済新聞主催の論文コンテストに応募。幸運にも選ばれ、他の当選者たちと賞品のアメリカ旅行に参加したことで、視野がさらに広がりました。その後も格差や差別の構造に関心を持ち続け、京都大学大学院人間環境学部修了後、ロータリーの奨学金でサセックス大学IDSでジェンダーと開発を学ぶ機会を得られたことは、幸いでした。

1995年、サセックス大学在学中、ジェンダーと開発の講義の中で、国連開発計画出版『人間開発報告書』のジェンダー開発指数（GDI）とジェンダー・エンパワーメント指数（GEM）に出会い、大きな感銘を受けたのを今でも覚えています。2010年からはジェンダー不平等指数（GII）が使われていますが、原点であるGDIとGEMが、複雑になりやすい社会の男女格差を、世界で初めてできるだけシンプルな形で数値化したという点は、画期的であったと言えます。その時出会った「人間開発」の理念は、それからの私の人生に大きな影響を与え続け、仕事だけでなく生き方の拠り所となりました。

1996年に国連工業開発機構、京都のNGOでの経験を経て、1998年にJPOとして国連開発計画パキスタン事務所に赴任。それ以来、国連開発計画の東京（現駐日事務所）、スーダン、ジャマイカ、フィジー（現パシフィック事務所）、ベトナムの各事務所を経て、今年2021年7月までモルジブ事務所にて常駐代表を務めました。上で述べた通り、サセックスで出会った私が強く信じる「人間開発」を国連の現場で20年以上具体的に推進できたことは、大きな喜びです。また、初めての出産を当時駐在していたパキスタンの首都イスラマバードの病院で経験したことも、今となっては良い思い出です。

さて、話はサセックス大学での「人間開発」との出会いに戻ります。ご存じの通り、人間開発は国連開発計画のミッションでもあるわけですが、その核にあるところの「人間の選択肢を広げる」理念が私の人生をエンパワーし続けていることを、この歳になって再認識するとは、思いもしませんでした。

私は2019年から当時まだ中3の息子を神戸の寮に置いてモルジブで常駐代表をしていたのですが、コロナが深刻になるにつれ、様々なレベルで家族生活に支障を来すようになりました。ロックダウンが進む中、夫が外国籍であることもあって、一時は二人で日本に帰国して息子に会うことさえも難しくなっていました。責任の重い、またやりがいのある仕事を満喫していた時のことでしたが、結局、人間開発の説く人間中心のための選択肢を私が行使できなければ誰ができる、と言う思いで、息子の住む日本に帰国することを決めました。休職という制度があることにも感謝。人間開発の理念にエンパワーされ、私は私自身と家族が再び人間らしく生きることを選択できたわけです。

久しぶりに日本に住むことになり、改めて紅葉の美しさや新米のおいしさに感激。一方、浦島太郎のように戸惑ったり、20年前とちっとも変わらない（あるいは逆行している？）男女格差やその他様々な事象に一喜一憂するこの頃です。



（モルジブの自宅から見た風景 2021年夏）
尚、最近では国連のブログや外務省の2020年版開発協力白書に寄稿させていただきましたのでご関心の方はそちらも併せてどうぞ。

(<https://www.jp.undp.org/content/tokyo/ja/home/blog/2020/akiko-fujii-oped-covid-gender.html>)

(https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/hakusyo/20_hakusyo/honbun/b1/feature2.html)

Alumni Now!

伊東 早苗 (いとうさなえ)

MPhil/DPhil in Development Studies

Institute of Development Studies 1999年修了

名古屋大学大学院国際開発研究科教授 (Development Studies)

国際開発を勉強したきっかけ

私の初めての海外経験はバングラデシュで過ごした2年間でした。1980年代後半に、青年海外協力隊員としてバングラデシュのコミラ県にある「バングラデシュ農村開発研究所」という研究所に配属され、農村調査に携わることになりました。当時、バングラデシュは援助の実験場といわれ、バングラデシュ滞在中は、草の根の開発現場で様々な援助プログラムを目にしたたり、関連する国際会議に参加させてもらう機会にめぐまれました。非常に貴重な、宝物のような2年間でしたが、普段は農村にはりついて仕事をしていたため、より広い視野で、国際的な援助の潮流についてもっと勉強したいと思うようになりました。そこで、旧宗主国として南アジア諸国の開発に大きな影響力をもっていたイギリスのサセックス大学IDSで勉強することにしました。

イギリスで生活してみると、それまでバングラデシュと日本だけをみて考えていたことが間違いだったことに気づきました。すなわち、バングラデシュと日本とを比較して、バングラデシュはこうだから途上国なんだと勝手に思っていました。日本とは大きく異なる先進国イギリスのあり方をみて、自分の発想がずれていたことに気づいたのです。



IDSでの勉強

私がIDSに留学した頃は、ちょうど日本がトップドナーとなり、援助に携わる日本人の人数が圧倒的に不足している時代でした。日本政府が様々な奨学金を出して、国際開発を学ぶ若い日本人の海外留学を支えてくれました。私も運よくその恩恵に預かることができ、経済的には恵まれた学生時代を送りました。ただ、その後、日本の大学で大学教員になってみると、当時を振り返って、あの頃もっとああしておけばよかったとか、こうしてお

けばよかったとか、色々後悔することはあります。私は日本の大学院で社会学を勉強した後、協力隊の「社会学」という職種でバングラデシュに派遣されたのですが、IDSは学際的なプログラムを提供していたため、初めて勉強する経済学の勉強がおもしろく感じました。それも、博士後期課程はバングラデシュの専門家であり、経済学者でもあるMartin Greeleyに指導を仰ぎました。しかし、経済学の知識も社会学・人類学の知識も、両方とも中途半端なまま博士の学位をとったのは、マイナスの面が大きかったような気がしています。ただし、その後、名古屋大学の国際開発研究科で、経済学から社会学・人類学、さらには法学や政治学まで、ありとあらゆる分野で博士論文を書いている学生たちを指導する立場となり、IDSで学際的な訓練を受けた経験が役にたったと思っています。

名古屋大学で教えてみて

私はもともと、さほど計画的に自分のキャリア構築を考えてきたわけではありません。そもそも私が大学生だったのは、男女雇用機会均等法の成立以前でした。大学卒業後に就職した外資系の企業ですら、男女の初任給が異なる時代です。それでも、「男性社員に負けないようにバリバリ仕事をしてほしい」と言われ、強烈な違和感を覚えました。こういう時代背景の中で、キャリアウーマンとしてバリバリ仕事をしたいとまでは思いませんでしたが、とにかく何とかして今の環境から抜け出したい、という脱出願望だけは本物でした。その後、なんとか国際開発の世界に入ることができましたが、それでもまだ、将来、自分が日本の国立大学で教員になるとは夢にも思っていませんでした。なぜそうなったのか、今でもよくわかりません。たまたま送った応募書類が選考を通ったので、成り行きにまかせて就職してしまったとしかいいようがありません。

こうして2001年に名古屋大学に就職してから、なんと20年も同じ職場で働いてきたことには自分でも驚いています。国際開発という自分が勉強してきた分野で、今度は国内外の人づくりに貢献できるというやりがいもありましたが、名古屋という街が、思いのほか、住みやすかったことも大きな要因です。それでも、先に書いた通り、開発問題に関わるあらゆる分野の研究指導に携わることになったことに、最初のうちは戸惑いを感じました。国際開発研究科とはいいながら、国際開発とは関係のない学問分野で訓練を受けてきた同僚が多数おり、彼らからは日常的に「そもそも国際開発という学問分野があるのか？あるとすれば、それはどういう学問分野なのか？」と問われ続けました。こうした同僚からの問いかけに対応する必要上、この20年間に Development Studiesはどのように体系化が可能で、それを同僚や学生にどう伝えたらわかってもらえるのかをずっと考えながら仕事をしてきました。それを考える上での私の原体験はIDSで学んだ日々です。今の自分のキャリアにつながる下地が、あの環境の中でつくられたのかと思うと、あらためて深い感慨を覚えます。

Sussex サロンのおしらせ

5月のSussex サロン開催のご案内

同窓会の皆様

皆様は、世界中のいろいろな国々で働いたり、旅行したりしながら、コーヒーを召し上がっていらっしゃると思います。世界にはいろいろな種類のコーヒーがありますが、それらの品質と味をわからずに飲んでいらっしゃる方も多いと思います。そこでコーヒーのスペシャリストである卒業生の黒田史穂子さんに、コーヒーの栽培から焙煎してコーヒーになるまでのプロセスを教えていただき、品質と味の違いについて教えていただきます。黒田さんは、コーヒー大好きで、「コーヒープロ」の資格である「SCAA/CQI認定Qアラビカグレーダー」を持っておられます。

開催日：5月21日(土)

時間：午後8時—9時半(日本時間)

場所：ZOOM方式

スピーカー：黒田史穂子さん

(MA Gender and Development, 2003年卒)

SCAA/CQI認定Qアラビカグレーダー



国際派プロであるためには、いろいろな教養が必要ですが、コーヒーについても、プロの知識を少しばかり頂戴して、教養とされては如何でしょうか？ 味は好きですが、その栽培から焙煎、入れ方までの知識を持っていることは魅力的な教養となりましょう。

正式なご案内は、4月に皆様にお送りしますので、多数の皆さまのご参加をお待ちしています。



皆様の特技を募集しています！

同窓会会員の皆さまがお持ちの特技を事務局にお知らせください。あるいは、特技をお持ちの方をご存じであれば、ご紹介ください。

その特技を、左欄にご紹介した黒田さんのように、SRIDサロンでご披露いただき、他の皆さまとその知識・経験を共有し、お互いの教養を少しでも高めましょう！

こちらのメールアドレスまでご連絡ください。
(makoz.kitchen@gmail.com)

同窓会会員と幹事募集のお知らせ

サセックス大学同窓会(日本)では、現在、同窓会会員と活動をリードしていく担当幹事を募集しています。同窓会幹事の担当していただきたい活動は以下のような内容です。ご相談に応じますので、可能な範囲でのご協力をお願いします。

総務、会計、ニューズレター、サセックス・サロン、パブ、大学フェア支援等

ご協力可能な方は総務担当の野田までご連絡ください。yusukenoda0803@gmail.com

編集後記

今回のニューズレターを担当しました2019年卒の関根真杜と申します。ご多忙の中、寄稿頂きました皆様には大変感謝をしております。

オンラインでのSussexサロンの開催も予定しており、よりネットワークの活発化に努めて参りますので、同窓会活動へのご協力をお願い申し上げます。

ご意見等ございましたら、こちらのメールアドレス(makoz.kitchen@gmail.com)までご連絡ください。